

一夜（戯曲）

三好十郎

1

荒れた山小屋

窓外の崖を晩秋の夕陽が赤く照らしている。

土間にすえられた赤さびた鐵板のストーヴを燃やしつけようと、しきりに新聞紙を丸めては火をつけてくべている男A。四十七八歳。

どこかで山鳩が二聲ばかり。

その最後の聲が消えて忘れた頃になってAの耳にはじめて聞えたかのように、ギクツとして窓の外を見る。

耳をすましている……

窓外の崖地を、夕陽の名ごりがスーツとかげって暗くなつて行くのが見える。

パチパチとストーヴの音。Aは眼がさめたように再び新聞紙を丸めてくべだす。  
……その古新聞紙の活字にヒヨイと目をとられ、動かなくなる。べつに読むでもなく、ただう  
つけたように目を寄せたまま、石のようになっている。

不意にメラメラとストーヴの薪が燃えだす。Aはやつとその方へ目を移し、長い溜息を吐いて  
から、今度はユックリと、わきの薪をストーヴに突っこみはじめる。  
窓外はトツプリと夕暮れの色。

ゴトンと音がして、二尺ばかり開けたままになっている——と言うより締まらないのでそのま  
まにしてある正面の戸口から、男B（三十四五歳）が入って来る。

平凡なセビロ姿に、ボストン・バッグをバンドで肩にかついでいる。Aの方は板張りの床のは  
じにリュックサックを置き、ズボンにゲートルを巻いたりして一応山あるきの姿だが、このB  
の方はたった今都会から来たばかりのような姿である。寒さと疲れで蒼白な顔に、左の腕が不  
自由らしい。

B ……（聲がかすれて）今日は。

A お。（と低く言って立ちあがっている）

だまって見合っている二人……

B ……。やっかいになりますよ今晚。

A いやそりゃ……

B スノマタ小屋でしょう此處は？ せんから見るとだいぶ変っちゃったが……

A スノマタ？ スノマタと言うんですかね、ここ？（屋内をなんとなく見まわす）

B ……すると、あんた番人さんじゃない？

A やあ、いやいや、わたしは先刻着いて今夜ここに泊まるかどうかと思うていたところ……

B そうか。それじゃ、ま。（土間をフラフラと歩いて板の間のはじめにポストン・バッグをストンと置いてフーと息を吐く）

A ……ひどく疲れているようですねえ？

B いや……何しろ寒くって、フウ。

A あたりませんか。やっと燃えついた。ストーヴがこわれているもので、苦勞させられましたよ。でも薪木はこの通り山と積んである。

B ありがたい。（寄って来て手をかざす）フウ。昔っから薪木は豊富な小屋だ。一步外に出りや雑木がいくらでもあるから。

A するとあんたチヨイチヨイ来たことがあるんですな？

B チヨイチヨイと言うわけでも無いけど（と、どこかの方言まじる）ズツとせんに二度ばかり。あんたあ、初めてかね？

A (それには答えないで) もうちよつとノセば、その澤村とか言った一番山奥の部落があると聞いて来たんですがね、ヒョツとこつちへ入りこんでこの小屋を見たら、もう歩くのがイヤになりましてね、ハハ。

B 景色は良いからね、このへん。……するとその澤村へ行くんですか？

A え？(と変な顔で相手を見て)……なに、それから都合で越後の方へ抜けられれば抜けて見たいなんて思ってたね。

B よつぽど山が好きなんですわねえ。

A やあ、なにしろ、気まぐれで、ハハ、あんたは何かこのへんに御用ですかね？

B いやあ……その昔、この山小屋にや、チョットした思い出がありましたね。なんとなくつかしくなつたもんで。

A 若き日のなんとかで——きれいな人と御一緒だった？

B いやあ。(とすこし元気になって来て、わきの薪を一本とつてストーヴに投げこみながらニヤリと笑って) へへなあに実は東京から逃げてきたんだ。

A ……(ジロリとBを見あげて) 逃げて——？

B へへ。……(ストーヴの煙に目をしわめて) まるつきし、首がまわらなくなっちゃった。

……

A そんな、あなた——

B さて、ところで……と既にすっかり暮れてしまった戸外を見て) ここで夜を明かすほかにしかた無しか、こう暗くなっちゃ。

A そうですねえ……（これも外を見ている）

B だがメシが無いのはつらいな。……こんなことなら下の宿場でなんか仕入ってくるんだっけ。

A 食べるものならわしが持っていますよ。

B そうですか――

A ただ飲むものをどうすればいいか。

B それなら僕がウイスキーを二三本持って来てます。（ボストン・バッグを顧みる）

A いや飲むものと言っても私の言うのは飲む水で。さっきそのカメをのぞいたらひとたらしも無いんでね。ヤカンにはちゃんとこうして有るが。

B あゝ、水なら直ぐ外にカケヒが引いてあった筈ですよ。

A そら、ありがたい。（とヤカンを持って起ちあがる）どのへんです？

B そこを出て右手の……どれ、僕がくんできませんよう。

A あんた疲れている。（スタスタと出口へ）それに私あ水でちよつと顔を洗いたいんでね。どう言うのか一日風に吹かれてきたら、顔がガパガパになってしまつて。（夕闇の中へ）

B ……あゝ、まっすぐ行っちゃダメなあ！ ちようどこの正面が崖でね、真下が、ひでえガレになつてるから、うっかりして落ちたり、飛びこみ自殺も間々あるんですよ。

A （戸外の闇から顔だけ白くこつちへ向けて）へえ、この正面がねえ？

B フツと消えると一気に下まで、ウンもスウもなしで梅びしおみたになつちまう。

A そうですか。……（右手へ歩み去つてすぐに聲だけ）こつちですね？

B そう、その突き当り……（闇の中をのぞいていたが、やがてガクンとなつて再び火にあたる）

……うう。（低く唸る、一人になってあらためて疲れが出たらしい。アゴを出してしばらく無感  
覚になっている）……（パチンとストローヴの薪がはぜる。その音でフツとわれに返って、キョト  
キョトと屋内を見まわす。自分のボストンバッグを見てから、向うの隅のAのリュックサックに  
目をやり、立ちあがりかけるが思いとまって、Aの立去った戸外の闇の方を振り返る。やがてフウ  
と息を吐いてから、背広の左の袖を骨を折ってめくる。汚れたホウタイが現われてくる。二の腕  
あたりにケガをしている。ホウタイをほだきにかかるが血でこびりついていて痛むとみえて、途  
中でやめて元の通りにして、また袖に入れる。その左腕を右手にかかえてジーツと正面を睨むよ  
うに見て、何か思い出している。……フツと我に返り、四邊を見て、Aのリュックに目をつける。  
その表情が急に別人のようになっていく。スツと立ってリュックのわきへ行き、戸外をチラツと  
見てAがもどって来る心配のないのをたしかめてから、素早くリュックの口を開け、右手を突っ  
こんで中のスエータアを引き出す。まるで若い女の着るような濃いエンジ色の毛糸のスエータア。  
……再び手を突っこむ。今度取り出したのは、一目で汽車べんとうとわかる包みである。Bは変  
な顔をしてそれをわきに置き又手を入れて取り出したのが又汽車べんとう。なにか少し異様な気  
がして、二つのべんとうをマジリマジリと見ている。……戸外で何かの心配がして、Bはハツと  
してべんとう二個とスエータアを急いで元通りにリュックに入れて紐をむすび、元の席に帰る）  
……（Aが表にもどって来るかと思っていると、先ほどの心配は風であつたと見えて、Aはもど  
って来ない。Bはストローヴに薪を入れる……）

そこへやつとAが闇の中からもどってくる。水の入ったヤカンと片手にはタオル。

A やれやれ、やっと目がさめた。冷たい水だ。

B カケヒのもの、なんとか窪、たしかもう一月もすると氷が張るんだって言ってましたからねえ。

A 道理で手が切れるようだ。言いながらヤカンをストーヴにかけ、Bの向いに腰かける) さて、飲むものができたと。

B その前にウイスキーをやりませんか。

A そりやどうも。じゃ私も食べるものを出すか。(トリュックの方へ歩み寄りながら) はは。こうなると、いやでも今夜はあんたと此處で御同宿と言うことになりますな。

B そうですねえ……(ボストン・バッグを引きよせて、紐でくくりあげた口を開けにかかる)

——  
(溶暗)

——  
(溶明)

ストーヴのわきに長腰掛を寄せ集めて、その上にストーヴを挟んで向かい合ってあぐらをかき、各自の前にかけ茶わんが一つずつ。二人の間に、ウイスキーの角びん二本と、食いあらされた三個ばかりの汽車べんとうの箱とサンドイッチの箱など。ストーヴはトロトロと燃え、戸外はベツトリと暗い。二人とも酔っている。Aは眼つきがトロンとなり始終うす笑いを浮べて、からだがむやみとだるいらしい。Bは顔色が青くなり眼つきも光を増して、ムズムズと膝などをゆすぶったりして落ちつかぬ。

A ……どうも、酔った。

B どうしてどうして。飲みっぷりの良いのにや、たまげちゃったよ。ウイスキーなんて飲んだことねえなんて、嘘だあ。

A だから憐れだと言うんですよ。憐れびんぜんなりだ。嘘じゃ無いです。へへ。自分にや飲めないもんだと思っていたんだから、第一、たまあに飲む酒にしたって、ひどい安酒を、あんた、一合の上をやったことがない。

B じよ、じようだんでしよう！

A じようだんじやない。ここへ来てじようだん言ってもはじまらん。その一合がね、どうにかしてちよつと過ぎると大苦しみの、もどしたりしたんだから。ズーツとこの、酒は嫌いだと自分のことを私あ思つて来たんだ。

B けつたいな事言うなよ、おっさん！



A へへ、それがここでこうしてウイスキーを飲んだら、なんとまあ、これがうまいと来た。どうも、まったくのところ、けったいな話ですわ！

B ホントかなあ。

A ホントかなあとは、私が言いたいんだ。キューツと、このへんをかきむしるような気がしてね、なんともかんとこの、こんなふうなウマさが世の中にあるなんて、これまでまるつきり知らなかったんだから、あさましい。へっへ、ホントは私がズーツと好きで、三十年の上からあこがれて来たのは、実はこれでね。これこれ、これです。（と食い荒らした汽車べんとうをハシでつつく）

B へえ？ ……べんとうがねえ！

A えっへっへ！ そうです。汽車べんとうですよ！ 人間と生れたからには、一生一度でいいから、こいつを腹のふくれるほど食ってみたい。そう思ったんだ。そう思い通して今日までやって来たんだ。一番最初は、十二三のじぶんだったかねえ、あれは、いっどこで食ったんかなあ？ どうでまあ、誰かに買ってもらって食ったんだろうが、そいつが、よっぽどうまかったんだなあ。それ以来、今日が日までどうぞして飽きるほど食いたい食いたいと思いつづけてきた

B そいつは、しかし、今日が日までと言ったって、たかが汽車べんとうじゃないですか、一つ一万円もすると言うわけじゃなし、どこだって売ってるしねえ。

A だから変な話と言うんだあね。いやさ、変な話と言ったって、そいつが今までの私にとつちや変でもなんでも無いこの——いやいや、わからんだろう。わからんでしょうな？

B わからんねえ。

A わからんだろう。当の私にもわからんのだから。……（キヨロンとして周囲を見まわして不意にゲラゲラ笑いだす）あっは、は、へっへ、はっは！

B なんですか？ なんだよう？

A ……（再びキヨロリと笑いやんで）わからん。全體、どうしてこんな話をはじめたんだろう？

B だからさ——

A （だしぬけに両腕をのばす。Bはギクツとして身を引いて、右手を上着のポケットに持って行く……）じゃ見ないよ。全體だなあ——（言いながらリュックを引きよせて、スエーターやタオルなどを取り出して、わきにはねのけて、その下から取り出したのは汽車べんとう、一つ二つ三つと、続けて五六個、サンドイッチの包みもまじってはじめっから二人で食い荒らした分も加えれば、十個に近い）出せと仰せあれば、まだ有るぞ、へっへ、どうだ？（酔漢らしく子供っぽい得意さ）

B うーむ。……（内ポケットに持って行った手をそのままに、アツケにとられて、うなる。Aのリュックから爆弾が出て来たよりも意外だったようで、ほとんど恐怖に近い目つきでAと汽車べんとうを見くらべている）

戸外を風の渡る音がザーツと鳴る。

A えっへへ……。

B この、こ、こ…… (どもっている)

戸外を再び風が鳴って外の羽目板がカタンと音。

A うん？ (と入口を振り返る)

B え？ なに？

A いや、足音がしたんじゃないですか？ どなた？

B おっ、来やがった！ (と不意に目がさめたように飛びあがって、脱兎のように入り口に走り寄り、中腰になって戸外の闇をすかして見る。いつの間にも内ポケットから出したのか右手に構えている黒い物はコルトの小型自動ピストル) 誰だっ？…… (闇に答えなし) そこに来たのは誰だっ？

A うん？…… (あっけにとられて、そちらを見ている)

B 返事をしないと、うつぞっ！ ……誰だっ？ 組のものか、それとも袴田か？ ……返事をしねえと—— (ザサーと戸外に風) ちきしょう！ (右手をあげてコルトのひきがねをひく。しかし弾丸は出ず、カチリと自動輪が鳴っただけ) ……う？ (びっくりしてそのコルトをあわてて見しらべてから再び戸外をうかがう。口の中で低く) 野郎！

A ふふ…… (それを見ているがBの殺気だった様子が正まのものには見えならしく、薄笑うしろめいをつづける) ……

サーと風の音がして今度は明らかに枯れ枝が羽目板を打った音。

A はは、風だ。木の枝がおれたらしい。

B ふっ！……（ゲツソリして元の席へもどる。すこしヨタヨタしてフウと酒の息を吐き、右手を泳ぐようにしてコルトをAの手の上に落とす）ちきしょうめ！

A （自分のものを受取るように自然にコルトを取って）どうしました？

B へっ、醜たいなあ！（ガツクリと板の上に坐る）

A なあに、この……うん？ 右手にあるコルトをなんとなく珍しい玩具でも見るように、クリッ、クリッと言わせて、銃口をのぞく。するとだしぬけにダツと爆音がひびき、弾丸はAの首のわきをかすめて小屋の天井板のどこかにカンと鳴って打ち込まれる）……あん？（まだびっくりしない。再び引きがねを引いたと見えて更に一発の爆音）

B なんだ、やっぱし弾あ、まだ入ってるじゃねえか。（げんなりしている。二人とも、もしかすると弾丸がAに命中していたかもわからない危険をかんじていない）……焼きあ廻ったよ濱の笹本とも言われた男がああ。（ドタンと板の上にあおむけに寝る）

A は！（と発揚してヒョッコリと立つ）いいじゃないかよう！ いいじゃないですか！ と、かっぽれ、かっぽれ！（歌うように言いながら、コルトをつかんだ手で踊りの手ぶりをしながら）甘茶でかっぽれ、は、よいよい！（手拍子を取って両足を踏む）沖の暗いのに、白帆が見える、アリアヤサツサ！（踊りの手はアヤフヤ）……あれは紀の国、ヤレコレ、コレワイサ、蜜柑船え！

(歌の節も全くデタラメになる)

B (踊っているAを下からジロジロ見ていたが) 蜜柑船か。……あんたあ、何と言うんだあ？

A コレワイサ！ うん？ なに？

B なんと言うんだね？

A 私かね？ (踊り出した時と同様に突然に踊りをやめて) ……へへ、名前？ 名前なんかどうでもええ。

B だけどさ、こうして一晩いっしよに暮らすのも何かの縁だからな。

A 縁かね？ ……あんたも若い人に似合わないと言いますねえ。笹本さんと言うんだって？

B だから俺も名乗ったんだから――

A いやいや、そんな意味で、この――なに、私は熊谷と言う――熊谷由三と言いましたね、東京ですよ、ハハ、つまらん勤め人です。

B 熊谷さんか。……

A 名前なんか有っても無くっても同じような事でね。熊谷由三でもよけりや虎山由介でもよろしい。女房があつて子供が三人いて、年は四十七。

B へえ、四十七ですか？ おどろいたな、僕あ又、六十近いおっさんかと思った。

A 六十はかわいそうだ。いつでもふけて見られるには見られるが、いかになんでも六十とは、あんた！

B いや最初ですよ。それが、こうやって酒飲んで、踊っているあんたを見ていたら、今度はまるでどうも、三十前の、つまり俺より若い人を見てるような気がしたから変だよ。

A そりや、しかし、そうかも知れない、なんだか、どういふのかねえ、急に自分が若い時分に返つたような——いやいや、どうもこの、若い時分にもこんな氣持になつたことはついぞなかつた。

B そうですか。すると反対だな。僕あまた急に年を取つちやつたような氣がするんだ。三十六の人間が五十の爺いみたいな、イヤアな氣持がすらあ。

A と、よいよい！（と再び踊りだす。その姿をすこし衰えたストーヴの焰に照らして、黒い大きな影ぼうしが奥の壁と天井にユラユラとゆれる）

——  
（溶暗）

3

——  
（溶明）

また時間がたつていて、夜が更けわたり、二人はストーヴをへだてた板床の上に寝ている。ストーヴの中はすっかりオキになって、また明るい。その明かりの中に上衣とスエータアを着て横身になり顔をこちらに向けて目をつぶっている。Bはどこからか引っぱり出してきたボロ毛布をあごの所までひっぱりあげて仰向いて寝ている。

……永い間

B ……（身じろぎもしないままに低い聲で語りだしたのが寝言のように聞こえる） ……戦争のせいだと言う。誰に言わしても、きまってそう言うんだ。そう言うよ。 ……違うんだなあ、そいつが。 ……第一、俺あ出征こそしたけど、戦争なんかしやしねえもんな、誰とも。戦争てなあ、つまりが人を殺すことだろ？ そして殺されることだろ？ 俺が殺したなあ豚だ。そうよ、野生のなあ、ジャングルの中にゴソゴソと生きているちっちゃなドロ豚だ。そいつをつかまえちや食ったんだ。それから海岸へ出ちや魚あつかまえて食ったよ。イモはふんだんにあるしなあ。とにかく食うことと寝ることしか無えんだもの。むやみとブクブクふとってね、豚さそれこそ。それが戦争だったんだ。敵にも味方にも、なんしろ実弾こめた銃で人間にねらいを附けたことさえ無かったんだからねえ。第一、ふだんの出入りには銃なんか持ってねえ兵隊だもの。ゴボウの剣だけを腰にぶちこんで、ノソノソしていたんだ。平和にもなんにも、人を殺すなんて、まるで夢のような話でね。 ……それが戦争がすんで帰って来てから人を殺しちやっただから、まるでどうも皮肉な話さ。

A ……ううむ。（少し身じろぎをして低くうなる。しかし目をさましてBの話の聞いているのか、眠りこんで唸ったのか、わからない） ……（再びしずかになる）

間……

B ……（これも動かさずジツと天井裏を見ていたのが再びボソボソとしゃべりだす） 変な話さ。どだい、運が良いんだか悪いんだか、あの島から内地に帰ってくるんだって船で別の島へ転進と

か何とかでウロウロしている間に終戦になったんで、なんとなく帰って来ちゃったんだよ。ギヤアギヤア言つて玉砕したり捕虜になったりした連中こそいいツラの皮さ。こちららあポツカンとして、肥え太って東京にいたんだもの、気がついてみたら、戦争みてえになったのはそれからさ。つまり戦争でドンドンパチパチ世間がさわいでいる時はまるつきり平和だよ。戦争がすんで平和になったら、戦争がはじまつちやった。普通と反対だ。そう言ったようなグレハマな人間さ、この笹本浩次郎と言う男は。へへ！それも実につまらねえ、なんでもない事からこんなふうになつちやったんだ。……いえね、東京へもどつて来て、それで、終戦後のテンヤワンヤだろう、そこい今言つたポカアンとしてフラフラしてたんだ。かつぎ屋やったりなんかして。内の者あ、たいがい戦争中に死にたえてしまつて、家族と言つたつて戦争前から関係のあつた女と又なんとなくいっしょになつてくらして、その女の伯父さんがいて、それと俺の三人ぐらしなんだ。近県のあちこちや、時によると長野県の奥までかつぎ屋でゆききしていたが、もうだらけきつて、戦争で死にそこなつたから、事のついでに生きていたままで……あれで一年ぐらいたつた時分に長野県から帰ってくる汽車の中の話だ。あれは大月へんから乗つてきたと思うが若いアメリカの兵隊が、まだパンパンになつてから半歳にもならないような日本の女を連れてすじ向いの席に坐つたんだ。この二人がさかりのついた犬のメスオス見てえに、まるでくつついたきりはなれないんだ。当時そういう景色は食傷する程見さされていたからねえ、又かと思つて最初は気にもとめなかつたんだ。最初そのアメちゃん兵隊が女の腕の中に抱えるようにしながら、ポケットからつかみ出した日本の金——いづれツリにもらつたか両替でもしたんだらう、あの当時いろんな小さいサツが有つたよなあ、そのサツタバの中から小さいサツをつまみだしては汽車の窓か



らポイポイとすてているんだ。紙の大きさをよりわけるとらうなあ、百圓より小さいのは惜しげもなく捨てる。これから女と二人で東京へ遊びに行くのに百圓以下のサツなどを使っているはまだるっこいと言うわけかな。サツは風に吹かれてビューツビューツと飛んで行くんだ。連れは女はニヤニヤして見ているきりでね、そこら中の日本人の乗客は、びっくりして眺めていたつげ……そんなときから俺はこの二人から目を離せなくなった。そのアメちゃん兵隊はその女がほんとは好きらしいんだ。西洋人はスケベエだと言うしね、それに兵隊だからカツエテルせいだとも思ってみたけど、俺にだって唯かつえているのとホントに惚れてるのの違いはわかるさ。ホントに惚れてるらしいんだなあ。いやいやただのカツエているだけだとしてもいいや。結局は同じ事かもしれないからな。とにかくその兵隊のその女へのひつついてる、そのひつつきようだがな、唯ごとじゃ無いんだ。ピタツと腰を、こう寄せて、相手の肩を抱き寄せたり、髪をなでたり、時々はエリの所にキッスみたいな事をする。毛布で自分と女の腰から下を追おうているけど、その毛布の下がどんな景色になっているか。……そうなんだ。それで、目はまるで脇目もふらず、トロンコにして女の目や口を見てるんだ。そうしたきり、一時間二時間と、汽車が立川近くになるまでだぜ。……俺あ、いつの間にかしびれたようになって、二人の方を見たつきりだ。……男と女がいちやついているのは俺はいくらでも見たことがあるんだ。花電車と言ったようなものは飽きるほど、それこそ鼻の先で見えて来る。それとは違うんだ。まるつきり違うんだなあ。唯のスケベエの、このエロと言うんじゃ無え。どう言ったらいいか、この、生き物が命をさらけだしてるとでも言うかね。人間——動物——なんとと言ってもいいが、その男と言うものと女と言うものとする——と言うより、生きてるてえことのドマンなかとでも言うかね、どうにもこうにも、ゲス

と言やあこれ以下にゲスな事も無えけど、そうさな、……神聖と言ってもいいよ。そいつが在るんだ。とにかく口では言えない。どうにもトロケるような景色だ。二時間あまり俺あ自分息をしている事も忘れてそいつを見ていた。その二時間余りの間、俺と言う人間がまるで変ってしまったんだ。革命。笑うかもしれないが、まるで人間が根こそぎ変わったんだから、やっぱし革命だ。いやさ、自分じゃ気がつかないんだ、そんな事。カツミがそう言うんだ。カツミと言うのが俺の内縁の女房でな、こいつがその晩俺と一緒に寝て、そしてそのあくる日、そう言うんだ。まるつきり変わってしまったげな。へッ、アメちゃんとパンパン見たんで、そっちの方でなんか猛烈なことしたんで、女房の奴そんなこと言うんだろうと思ってたら、そうじゃない。人間が変わっちゃったと言うんだな。ガラッと変わったそうなんだ。自分にやよくわからんさ。なんか変なふうになってしまったような気はするけど、さてどこがどうなったか自分にやわからん。……そのうちにハツとした。やっぱしそうかと思つた。と言うのは、そのカツミが、それをキツカケにしてすっかり変わっちゃったんだ。女は男次第で変わるものらしいね。とにかく、それまで知らなかった事が男と女の間にあることがわかつた。するとトタンにこの世の中が今までとは違つたように見え出した。そう言う。……とにかく、それまで普通すぎる三十三になつた古女房が、だしぬけにインバイみてえな女になっちゃつた。もう、内にジツとなんかしてないんだ。男を二人も三人も一気にこさえる。そいで競馬や株をはじめやがつた。いや、たまげたのなんのつて。その変りよう——そいつが全部おれが変わつたからだと言うんだ。それつきり、ドデン返して、これまでの地獄が極楽に——それとも極楽が地獄にかな——なっちゃつて、二人ともまるで軀中の血が荒れつちまつた。俺あ、以前に知っていた横浜の土建屋の所で屋根を貸してもらつて

ブツタクリみてえな何でもブローカーになったんだ。さあ、メチャメチャさ、それから、知っちゃあいねえよ、戦争だ、そこら中がな。……そういうわけさ。世の中が平和になってから俺あ戦争になったのさ。そいで五六年、いやもうさんざんの事をして来て、そいで今度、すっかりこの、世間をせまくしちやった。……らしいんだ、どうも。なあに、はじまりは何でも無えチヨットした事でね、へへ、今となつちや珍しくもなんとも無え話さ。なあに、ヒヨツと、まとまった金がほしくなつてね、つい、少し手荒いことをやっちゃつて……いやいや、最初は別にそんな気はなかつたんだ。ハズミだ。ハズミで、ついそう言つたことになつてなあ、三四十萬、とにかく手には入れたが、そのままつかまるわけにも行かんからズラかつてね、あちこち温泉場などを半月も歩いたか。へつ、ここの麓の村まで来て変な鑛泉宿に一晩とまつて、あくる朝——つまり今朝だ。金をしらべて見たらモノにした金は半月で使い果たしてカラツケツになつて。……何の事あ無い、金あ、ここまで逃げて来るだけに全部とんだ。プラス、マイナス、ゼロ。残つたものは、くたびれだけだ。どう言うんだい？ おかげで、へたあすると、俺あ、しめられるんだぜ？ だのにさ、……へつ、もつとも金、金といっても、もともとありや紙だ。紙つきれに過ぎん。そういやあ、そうに違い無いけどよ、その紙つきれのために、人間、……

そこでぷつんと言葉を切つて、じつと天井を見ていたが、やがてAの方へ顔を向けて、Aの寝息をうかがう。Aは身じろぎもしない。……Bはムックリと起きる。キョロキョロと小屋の内部を見まわしてから、再びAの寝姿へ。その目が異様に光っている。いつの間にかストーヴのオキが白っぽくなりかかっている。山中の闇の静けさがこの小屋に

襲いかかっている。

B ……（低くした聲で）おい君。 ……おっさん。 ……（それでもAは動かない。Bスツと立ちあがって音をさせないでAの枕もとに近づき、Aの寝顔を見下ろす。次ぎに、ちよつと離れた所に置いてあるリュックサックを睨むように見ていたが、今度Aの顔に視線を戻すと同時に右手で内ポケットのピストルをつかんでクリツと言わして撃鐵をあげている。その手がブルブルふるえている） ……おい、お、お——（低く言いかけるが聲がつつかず、それきりにやめて、銃口をAの額に近づける。歯が鳴らぬようにアゴをかみしめている。 ……Aは身じろぎもせぬ。Bは口の中でウツと言って目をつぶって発射しようとする。その下でAがゆっくりと寝返りを打つ。Bハツと飛びのく） ……ふう。 ……（飛びのいた所からうかがっているとAはまたスヤスヤと眠るらしい。Bガツカリして、ピストルをぶらりと下げたままAのリュックサックの底を外から足の先でつついて見る。それからチョットAの方を振向いて見てからスツとリュックの口に左手を突っこんで中身を手さぐり、取り出したのは再び汽車べんとうが一つ、さらに、一つ。次に薄い帳簿を一冊。それから百圓サツをたばにしたものを三束四束五束六束まで出して、それと眠っているAを見くらべている。 ……しまいにガツカリしたような、怒ったような顔になってサツたばをリュックにもどして、土間におり、歩くともなく入口の方へ。開けたままの戸口から戸外に行きかけて、シキイの所でファイと立ちどまり何か考えている。やがてグウ、グウ、とノド聲を二つ三つ出してから、そばの柱につかまって、せぐりあげる。ほとんど聲を出さない。 ……泣きやんでへタへタと柱の根元に坐ってしまいそうになるが、途中でやっと立ち直ってフラフラと戸外の闇に

消える)

……ゴソツときびしい音を立てて、ストーヴの中の燃えてしまった木がくずれる。後はシーンとして風の音も絶えている。

A うう。……(ムツクリと起きる。それまで眠っていたのか眠ったふりをしていたのか、Bの姿が無いのを見てもかくべつの表情を示さず、Bの立去った戸口の方に目をやったりしてウツソリとしていたが、やがて頬を指先でかきながら、ゆっくりと立ちあがって、その邊を見まわし、自分のリュックにさわってみてから、Bのバッグのわきに行く) ふん。……(バッグを見下ろしていた目をもう一度戸口の方へやってから、自分のものを開けるようにバッグの口を開き、中の物を取り出して見てはバッグにもどす。くつした、ワイシャツ、麻の細引、三つ四つの薬びんなど、最後にベツトリと赤黒い液でよごれたワイシャツが出てくる。血のりを拭いたようにも、また自動車か何かの車輪でも拭いたようにも見える。別の手で引っぱって見ると、かたまっているベリリと言う。……見ていてAは自然にしゃがんでしまう。そのまま目を釘づけになったまま動かずにいる) ……

戸外のちよつと離れた所から、もどって来るBが小石を踏みつける音がしてくる。それを聞いたAが、別にあわてもしないでシャツをバッグにもどして、ゆっくり立って、それまで自分の寝ていた所へもどって、元の通りにゴロリと横になる。……

ちようどその時、もどつて来たBの姿が戸口に見える。

——  
(溶暗)

4

静かな明け方の光が小屋を包んでいる。小鳥などが鳴きだす前の時間だ。

——  
(溶明)

AとBはすでに起きだしてストーヴに火を燃し、顔を洗ったりした後、黙々としてゆうべの残りの汽車べんとうやサンドイッチで朝めしを食べ終つて、わかした湯をのんでいる。沈黙は、しかし、わけのあるものではなく、白々とした早朝の光の中で自然に口かずがすくなくなつたものだ。

A …… (これは二三本ころがつているウイスキーのびんにわずかに残つた液を、のどを見せて飲んで) へへ、まったく、こんなにうまいもんだつたかねえ。

B なんしろ凄いや。ほんとかなあ？

A なにが？

B いえさ、これまで飲まなかつたというのがさ。

A まつたくだ。びっくりしてるんだ自分で。ふふ。…… (二人の間で昨夜と変わったことと言えば互いの言葉がぞんざいになつた點だけである。)

B そうと知ってたらもう二三本手に入れてくるんだったよ。

A 小さい時分からだ。どっかほかにホントの所があるような気がして来たんだ。見るもの聞くもの、食うものにしろ一切切切だ、今自分の前にあるものが、みんなこの假りのウソのもので、ホントのものはほかの所にソツクリ在る。……そういう気がしてしかたが無い。だから、しよっちゆう目の前のものにダメかされているような、どこまで行ってもまねごとをしているような気がしてねえ、わかるかねえ？ ……小さい時分からそうだった。

B へえ？

A んだから、じゃ、世間を茶にして、なるようになれと思ってやって来たかと言うと、とんでもない、まるで反対で、子供の時分からまじめ一方で、大きくなっても石部金吉と言うかな、つとめをしても一つの会社に二十年もしんぼうしてる、ふー、そいでいて、どこに居て何をしてても、そいつが自分の坐る場所じゃない、ホントの場所は別のところに在る。そういう気が抜けないんでねえ。

B わからんねえ。

A そいつが、今朝、寝起きにね、あんまり寒いんで眼がさめて、この小屋の中を睨めまわしながらヒョツと気が附いたら、そういう気がしなくなってる。いえさ、その、今の事がウソパチだという気がさ。変だ。……考えてみたら、ゆんべここへたどりついて、君に会ったりした頃かららしい。

B ウィスキーのせいかなあ？

A そうだろうか？ とにかくホントにピタッと、この、しろうしん正銘、わしあ生きてる

という気が、生れてはじめてしてるんだ。目がさめたみたいで、怖いような気がするんだ。

B そう言えば、あんたのツラあ、ゆんべ初めて逢った時とはまるで変っちゃった。

A だろう？ そうだろ君？ ……（ゴシゴシと平手で顔をこする）ふふ。……すまんけど、そのピストル、ちよつと貸してくれんか？

B ピストル？ どうするんだ？

A にぎって見たい、ちよつと。貸してくれ。

B ほいきた。（と意外とアツサリと内ポケットから出してAに渡す）弾はまだ有るから、そこのポッチを上にあげちゃだめだよ。

A いいじゃないか、まあ……（とBをねらう真似）

B ……（つツと真顔になって腰を浮かす）なんだと？

A はは、顔の色が変わった。

B 冗談じゃないよ。

A どうかねえ……（と不得要領に言いながらピストルの銃口をのぞいてから、それを自分のこめかみに當てる）これで、ここを引きや、それで一卷の終りか？……（そうしたままで話す）いえね、私には女房と子供が四人いる。子供の内で上の子二人は弟のタネでな——だろうと思うんだ。あとの二人が私のタネ・つまり私の家内は、はじめわしの弟の妻だったのが、その弟が急病で死んだんで、私とその後の亭主になおったと言うわけ。つまり、小さい時からのおさつきも言った、何もかもホントでないような気がするせいか、女とのひっかかりも無くて三十を過ぎてボンヤリ独身でいたんで、弟に死なれた家内が子供を抱えて行く所



はなしさ、親類中でそうしろと言うんで私が亭主に直った。兄が死んで弟がなおるといふ例は間々あるが、わしのはその逆でね、ちよつと珍しい。……もともと弟の嫁を嫌ひではなかつたし——もつとも大して好きでもなかつたけどね。……やつぱりあれで女が欲しかったにや欲しかったんだなあ。御方便なもんさ。家内もそれでちゃんとおさまつてね。私にしたつていいかげん幸せだった。その證據にセッセと稼いで、以来二十年内の者を養つて来たからね。……だけど、その時分から、いっそうひどくなくなったようだ。今言つた。目の前のものが全部ウソだという気分。そ言つたわけ。

B わからん俺にや。

A やれやれ、打てないなあ。

B え？

A いえね、この引きがね、ここらで引こうと思つても、イザとなると引けんなあ。

B あぶない！

A はい。（と言いながらピストルをBに手渡して）もういいんだ。どうだろう、ここをねらつて一つ打込んでくれんか？

B え？ どうして——死ぬぜ？

A 良い気持だろうと思う、スーツとして。

B だから、死んじまうよ？

A 死ぬう——？（いぶかしそうにBを見る）

B あんたあ、どうかしやあしねえか？

A ……まったくだ。(いつときボンヤリしてきてから、リュックの方をアゴで示して) 三十萬圓は、まだ有るだろう。ソツクリ君が取ってもいいよ。

B へっ、冗談——

A 冗談じゃないがねえ。

B どうした金なんだ？

A ……ふ、骨が折れた、あれだけ溜めるにやあ。役所につとめてコツコツと二十年かかっているしなあ。もつともその間、家の者を、まあ養つて来たんだから、それだけ残したことになるか？

B ……役人か、すると、あんたあ？

A なあに、人に言ったって大概知らんような役所でな、農林省関係のケチな所だ。……ちかごろ、どうも何だか今言った、ホントでないような気が益々ひどくなってね、家内やなんか神経衰弱だから、つとめを休んでいつとき温泉にでも行つて来たらと言う。なあに、食べるものがうまくって、よく眠れて、どこも何ともない神経衰弱なんて有るもんじゃない。いえ、神経衰弱にでもなるような神経を持ってりや、まだ頼もしいわけさ。しかしまあ、みんながそう言うし、温泉も悪くないと思つて出かけようとして、これまで積み立てた金をソツクリおろして見たら三十萬とすこし有る。ふふ……これだけ溜めるために五十近くまで働いて来たのかと思つてね。ちよつと妙な気がしたが、別になんという事もなく、それ持つて家を出て温泉を二つ三つ、あちこちしたが、ちつとも面白くないしね。神経衰弱でもなんでもないんだから温泉につかつて見ても何と言う事もなしさ。第一、せつかく持つて来た金の使

いみちがない。今時、たかが四十萬たらずの金、……パツと使い捨てようと思ってたやつが、どうにも何に使ったらいいかわからん。いや、惜しいわけじゃ無い。そんな気は無いんだ。ムダ使いでもなんでもしようと思っても使う所が無いんだねえ。とぼけた話で、……欲しいものが何ひとつ見つからんだ。せいぜい汽車べんとうなどを買いこむ位が関の山で……情けないことに、その汽車べんとうが、なんと、まるつきりうまくない。ぜんぜん食えない。……ボンヤリしてしまったねえ、だんだんつまらなくなってしまった。家にもどっても、しようが無い。……そいで、知らん間に、ここに来ていたんだ。……したら、急に、どう言うのか、目がさめたみたいになってる。どう言うんだろう？

B じゃ、とにかく、その目のさめた所で東京へ帰って、景気よくやったらどうかなあ。  
A そうさね。しかしそれもめんどろな気がしてなあ。また同じことのような気がする、どうで。考えたばかりで、ふくらっぱぎやなんかダルくなるんだなあ。

B そうかなあ、俺なんざあ、一年が千日あったって、そいで百まで生きていたって、いろんな、この、やってもやっても、やりたりないような気がするなあ。せけんの、ウゾウや、ムゾウ、この世の中に存分にカタキうちをしてだな、てめえが生きていることにガンと言ふほど、思い知らせてやりたいや。食っても食っても食いたりねえというやつでね。

A ……年かなあ、すると？ 老いぼれてしまつて、ホルモンなくしちまつたのかなあ？  
B それほどの年じゃないよ。

A そうだな、そうさ、若い時分からこんな調子だったんだから、年のせいじゃなしか。やっぱし、ホントの所がどつかほかに在るのか。……（ボンヤリしてウイスキーのびんを見守

っている)

B さあてと、……(手のピストルの安全装置を元へ)

A ……金はいらんのかね? 一年が千日あってもいいなら、金だっていくら有ってもよくはないかね?

B そりゃ……(と言いかけて、改めてAの顔に目をやり、Aがまじめに言っているのを見て、ギョツとして立ちあがる)……

A ……それとも、後ろから撃つかね?

B ……見そこなっちゃ、いけねえよ。そんな人間じゃねえんだ。

A だからさ……。

B 假りにも一晩いっしよに泊って、ひとつ物を食ったり飲んだりした。――

A 逢いがたきこんじょうに生を受けた。

B え?

A お経の文句にある……ジェット飛行機どうしが空中でぶっつかり合ったようなもんでねえ。

B そうさ、ここであんと別れれば、先ずまあ、二度と再び会うなんて事あないだろうねえ。(さきほどから話しながらバッグの始末をしたりしていたのが、この時立ち去る支度がすっかりできあがる)

A だから出会いがしらに殺し合ってもよかろうし、それとも両方から抱き合ってもええわけだ。

B (相手の変な真剣さを受けつけないで) へっへへ、おかまじゃあるまいし、男同志が抱き合って泣くわけにもいかんさ。

A …… (しばらく相手を見ていてから寂しい、しゃがれた聲で) そいで、これから君あ、どっちへ……?

B いったんこの下へおりて、奥へ奥へとナニして、行けそうだったら越後へ抜ける。

A 悪いことは言わんから、いったん横濱へもどってその——どういう事をやらかして来たか知らんが、自分から出て行って、とにかく身體をキレイにして、萬事それからしたらどうかなあ?

B 自首かね? 冗談いっちゃいけねえよ。そんなんじゃねえんだ問題は。逃げて逃げきつて、誰かから叩つ殺されるまで——人間でなくともいいや、神様でもいいよ。神様からとつちめられて、しめ殺されるまで、生きぬいてやるんだ。ドンづまりまで自分からくたばってなんぞやらねえんだ。へっ、この世の中の事なぞ、何が善くって何が悪いか、誰が知るもんけえ! 生きてる奴が勝だよ。どっこいしょ。(とバッグを持つ)

A だからさ、まだ若いんだし、サツパリして出直せば、もう一度やりようがありはしないかなあ?

B へっへ、ひどく老人じみた事を言うぜ。あんただって似たような事じゃないか、年が倍というわけでもねえ。

A 年の問題じゃないさ。私は、どっち向いても同じことでああ、ふふ、自分と言うもんが無いんだから。

B すると、これから——東京へ帰るんかね？

A そうさねえ……（ボンヤリと立ってリュックを片腕にひっかけて下げて、汽車べんとうの空き箱をストーヴの中におとす）……この小屋もこれから寒くなって、どうなるのかねえ？

B もう先ず来春まで誰もこねえなあ。夏場こそ山あるきの人間がたまに寄るけど、これから一と月もすると直ぐ雪だしね。吹きだまりだから、どうかすると七八尺も積るんだそうだ。  
A 雪の中か、すると……（戸外をすかして見る。空き箱がストーヴの中でポーと燃える）  
じゃ、まあ、これでナンだか、君も気をつけてなあ。

B ……この下まで、いっしょに行かないかね？

A いや、私は足がのろいから、後からボチボチ。

B そうか。じゃ、ま……（バッグをさげてスタスタと出入り口の方へ行きかけたのが足をとめてAを見る）

A ふう……（低くつぶやいて、これもBをボンヤリと見守る。両方でマジマジと見交して立っている。……間。……朝の風の音がして、遠くで何かの小鳥が鳴く）

B ……（口の中で何かブツブツ言う）

A うん！

B 胸ん中あ、すっかりぶっちゃけてさ——吐き出して言ったらいいんだよ。……いえさ、俺がよ。なぜ、いけねえ？

A なんだよ？

B うむ。……さびしいねえ！ そうじゃねえか？（歯を食いしばって睨むようにAを見る）  
A そうさなあ……（気が抜けたようにボソボソとして相手に乗って行こうとせぬ。先程と今度の二人の行きちがいの気の遠くなるような空虚さを、ストーヴの中でべんとう箱の燃える音がブリブリと鳴る）

B ふ……（ガツクリして両肩をおとし、不意にクルリと身を返してスタスタと出口へ歩いて行き戸外に出て右奥へ消える）

A ……（それをボンヤリ見送っていたが、フツとまだ手に残っている空き箱をストーヴの火の上に落とす。それがたちまちボーツと燃え出すのを見つめている）……（自分で自分にハズミを付けるように何か言うが口の中でモグモグ言うだけで言葉にならず。……腕にかけていたリュックサックのひもを左の肩にずりあげて、ノツソリと歩き出す。……戸外遠くで風の音。……出口の所まで行き、Bの去った戸外の右手の遠くへ目をやるが、既にBの姿は見えないようだ。シキイを踏み越えかけてから思い返して、こっちへ振り返って小屋の内部を見まわす。天井から板の間から壁、ストーヴなどをユックリと見てから、黒い土間に目をおとしてジツとしている。めいるように静かだ）……おっ母あさんよ。（かわいた声で言うて、その自分の聲に耳をすますようにしていたが、ただそれだけのことで、なんの感傷の味もなくクルリと身をかえして、シキイを越えてユックリと出口の正面を奥へ歩いて行く。その後姿が、開け放った出口の四角な空色の中にクツキリと見えていたのがやがて脚の方から吹き消したようにストーンと消えて、晴れた朝の空だけが残る）

ストーヴの中で空き箱がブリブリと音をさせて燃えつきようとしている。……  
非常に遠くで小鳥の聲。

(おわり)



底本.. 「三好十郎著作集 第四十六卷」三好十郎著作刊行会

1967 (昭和 39) 年 9 月 30 日 発行

初出.. 「群像」

1960 (昭和 32) 年 6 月号

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成 23) 年 3 月 2 日